

登録実践研修機関及び登録日本語教員養成機関の登録手続き等の検討に関する
ワーキンググループ（第4回、第5回） 主なご意見

【登録日本語教員実践研修・養成課程コアカリキュラム（案）について】

カリキュラム作成の基本的な考え方に関する意見

- 基礎試験に代わる養成課程を修了して実習を行う上で最低限学んでおく必要のあるものとして10の下位区分が示されたことはとても大切で、その後、日本語教育の現場に向かっていくという日本語教員の養成の流れ・体制をしっかりと築くために必要な提示だと考える。
- 実践研修において学習者の学びを妨げないことは大切であると同時に、実習においては思っていたようにいかない場合もあるため、その点は包摂するよう配慮いただきたい。
- 機関が養成課程や実践研修を評価する際の「ツール」という表現が曖昧なので、具体例を記載するなど、修正を検討いただきたい。
- 実践研修における評価は、一律の評価となるなど、国がやり方まで限定することは好ましくない。一方で、教員として登録される者の受けた研修やその評価が、当該教員を採用しようとする者等に確認されるものであるという意識も持った上で、適切な評価基準の策定等を含めたカリキュラム作成に臨む必要があるのではないか。

実践研修コアカリキュラムに関する意見

- 実践研修コアカリキュラムの「⑥振り返り」の「さらなる成長」という表現は漠然としすぎているため、日本語教師としての専門的な成長と人間的成長と両方を意味に含むような形で「自律的な成長」という文言を使用するとよいのではないか。

登録養成課程コアカリキュラムに関する意見

- 養成課程を修了すれば、基礎試験が免除となるということの重みを十分に理解する必要があるため、コアカリキュラムの中にも基本的な考えの部分等に明記しておく必要があるのではないか。
- 日本語教育に関する科目を教えている教員間における意識の統一や総合的な資質・能力の獲得が可能となるような創意工夫をすることは大切であると考え一方、各教員の現場経験等には差異があり、課程全体をコーディネートする担当者も必要となることから、負担が大きくなる可能性も考えられるため、意図についてはしっかりと説明い

ただきたい。

- 49項目のうち、30番目の「授業分析・自己点検能力」については実習の場で高められる能力だと思われるため、実践研修の部分にも関連するものを入れ込んでいただきたい。
- 全体目標から到達目標まで一貫して流れが整理されるように、重複は削除するなど、精査していただきたい。
- 15の下位区分の「異文化コミュニケーションと社会」と学習項目の「ダイバーシティと社会的包摂」については「ダイバーシティと社会的包摂」の方が上位の概念であるため、包摂関係を検討し、修正いただくべきではないか。
- 何を学ぶかということが主に書かれているが、特に求められる「資質・能力」養うためには学び方・学習活動のやり方についても明記した方がいいのではないか。
- 5つの全体目標は会議資料では(1)～(4)が並んでいるが、各項目が分散して書かれることになるとと思われる。その際に、日本語教育の実践と関連づけるということが明記されなければ、知識の注入だけをして終わるということにつながり得るため、(1)～(4)のいずれにも資料の通り「日本語教育の実践とを関連づけて考えることができる」という文言は入れておくべきである。

登録された養成課程等の評価に関する意見

- 登録を受ける際に示されたものが、登録後に形骸化することのないよう、公開させること等により継続して質を担保していく仕組みを整備しておく必要がある。

【登録日本語教員の資格取得に係る経過措置における日本語教員養成課程等の確認について】

養成課程等の確認の審査に関する意見

- 指定された期間内に提出等が完了しなかったものは以後受け付けないというような扱いはせず、その課程等に過去在籍していた方が不利益を被ることの無いように配慮いただきたい。
- 経過措置の適用を受ける方が本来受ける必要のない講習を受けなければならないようなことの無いように、関係する大学や教育機関に対して、課程等の確認の審査を受けるよう広く漏れなく周知していただきたい。

経過措置に係る問合せに対する対応体制に関する意見

- 経過措置のルートの確認等、たくさんの問い合わせが生じると予想されるため、手引の作成やよくある問い合わせの整理、コールセンターの設置など、教員の方々に不安や疑問が生じないようにしていただきたい。